

水田・里山放牧ニュースレター

第 8 号

2004年11月16日

発行 水田・里山放牧推進協議会
事務局 畜産草地研究所（那須）

〒329-2793 那須郡西那須野町千本松 768

TEL 0287-37-7003 FAX 0287-37-7132



徳島県の急傾斜の葉たばこ跡放牧

第4回放牧サミット、那須で開かれる

9月29、30日の両日、第4回放牧サミットが栃木県那須町のホテルエピナール那須で250名余の参加者のもと、盛大に開催されました(主催：日本草地畜産種子協会、畜産草地研究所)。

今回のテーマは、「水田・里山放牧による新たな土地利用・家畜生産方式の推進のために」ということで、まさにこの協議会の目的とぴったりのものでした。

現地検討会

第1日目の現地検討会では、バス5台を連ね、6月に水田・里山放牧推進協議会でも見学させていただいた福島県安達郡白沢村の大内武幸さん(繁殖牛16頭)を訪ねました。相変わらず牛の状態は良く、大内さんはますます牛の放牧飼養に自信を深めているようでした。ひとつ残念なことは去年まで借りていた地続きの土地が契約期限切れということで放牧できなくなり、草ぼうぼうの状態になっていることでした。土地利用権の調整の難しさをうかがわせます。白沢村では、120戸の肉牛飼養農家のうち9戸が水田里山放牧を始めており、今後さらに普及しそうだということでした。



牛の状態も良い大内さんの桑園跡放牧

次に那須の3戸の肉牛農家を見学しました。最初に那須地域放牧研究会の会長さんでもある相馬和至さん(繁殖牛16頭)の水田放牧を見学しました。あいにくの雨の中でしたが、わずかひと月の放牧で耕作放棄水田が見違えるほどきれいになっており、隣の耕作放棄水田と比べてその変化に参加者もびっくりしていました。相馬さんの放牧を見て、自分の所の耕作放棄水田にも牛を放して欲しいという話が出ており、来年はさらに放牧面積が広がるとのことです。



一月前の放牧開始時、牛はヨモギの中に隠れている



一月後見違えるほどきれいになった耕作放棄水田

次に訪れたのはやはり那須放牧研究会の会員である高梨幸一さんのお宅です。高梨さんは会社勤めで、日中時間が無く、家のまわりにはかなりまとまった水田があるので今年から放牧を始めました。放牧を始めるにあたって、ご夫婦とも脱柵のことを一番心配しました。以前、パドックから牛が逃げ出したことがあり、はるか遠くの田んぼまで牛を追いかけて、寿命が縮まる思いをした奥さんはなかなか賛成してくれなかったのです。近くの放牧をやっている農家にご夫婦で行ったり、普及所や試験場の説得もあり、しぶしぶ(?) 了解してくれました。

そういういきさつもあり、牧柵は高張力線 3 段張り、コーナーポストは足場パイプの支え付きという破られにくいタイプを採用しています。今では奥さんもほぼ安心して、楽になって良かったと言っています。

最後に、平山邦一郎さんの山間地の水田放牧を見学しました。平山さんは 70 才になり、牛(繁殖牛 6 頭)の世話もたいへんになってきたからそろそろやめようかと考えていたところに普及所から放牧の話があり、今年からやってみることにしたとのことです。たまたま放牧地で分娩してうまくいき、牛舎から地続きの放牧地なので親子とも自由に牛舎と放牧地を行き来できるようにしています。餌やりや糞出しが非常に楽になり、牛の状態も良くなって、これならやめるどころかもっと牛の頭数を増やそうかと考えているそうです。



あまりの見学者の多さに牛もびっくり



放牧地で生まれた元気な子牛たち

講演会・シンポジウム

翌 30 日は朝から講演会とシンポジウムです。東京大学大学院の生源寺眞一先生は、現在の輸入食料に依存した食生活と日本の農村風景や風土とのギャップが問題であり、放牧はこのギャップを少しでも埋めることができる方法ではないかと指摘しました。

長いことと牛の放牧研究をされてきた高知の上田孝道さんは、日本の歴史の中でかつては土地利用方式として広く放牧が行われてきたこと、現在荒廃しつつある野山に牛を放牧することで美しい景観と、土地に結びついた食料生産が回復できるのではないかと、そのための「放牧の作法」が必要であると述べました。

畜産草地研究所の小山さんはこれまで開発された小規模移動放牧のための技術を紹介し、さらに周年放牧や親子放牧の技術化が必要であるとしました。

さらに、島根県三瓶山で草原を利用した和牛の繁殖肥育一貫経営を行っている川村千里さん、福島県の桑園跡放牧、那須の水田・里山放牧、大分県の「おおいた型放牧」の事例紹介がなされました。



盛り上がったパネルディスカッション

パネルディスカッションでは、土地の利用権の集積がやはり問題であること、山林の利用はまだ制度的に困難が多いこと、山地傾斜地の放牧利用はまだまだ解決すべき技術的課題が多いこと等が明らかにされました。

徳島県における繁殖和牛放牧

徳島県立農林水産総合技術センター畜産研究所 福井弘之

1. 放牧の先駆者、藤原久義さん

徳島の山は急峻な地形を特徴としています。そのような放牧に不向きと思われる中山間地で、自らの判断で牛を放し、すばらしいシバ草地を完成させた農家があります。県西部の三野町太刀野山で和牛繁殖経営を行っている藤原久義（62歳）さんです。

藤原さんが放牧を始めたきっかけは、昭和57年に父親の二良（じろう）さんが「田畑に牛を放そうか。」その一言が始まりです。今思えば高齢の父親には、草を担いで急な坂を登るのは辛かったのかもしれないと、藤原さんは振り返ります。

放牧を開始した当初は、牛や草地管理が不十分だったことから事故も多く、いったん舎飼いに戻したこともありましたが、しかし、農業経営の中心であった葉たばこは重労働であり、どうしても管理の手間のかからない放牧を取り入れたいとの思いが消えませんでした。

ちょうどそのころ高知県の斉藤牧場を視察する機会があり、一面を覆うノシバに感銘し、以来、畦畔のノシバを採取しては牧場に移植し、10年後には2haのシバ草地が完成しました。平成4年に労働的にきつい葉たばこの生産を止め、家の周りの葉たばこ畑1.5haにも牛を放牧し、和牛繁殖の専業農家に転換しました。

藤原さんの経営の特徴は、所得率が60.5%と非常に高いことです。3.2haの放牧地と飼料畑をうまく利用し、生産費の購入飼料費を抑えています。診療、医薬品費もかなり少なく、牛が健康であることが伺われます。

中山間地のような地形では、限られた土地を有効に利用するために、傾斜地をどのように使うかということが重要となります。このような土地条件で、自ら考えて、自分の体力にあった放牧経営を実践することで、藤原さんは徳島の和牛放牧のかたちを示唆してくれている気がします。

2. 遊休地放牧の実証

徳島県畜産研究所では、藤原さんのような放牧事例を増やしたいと考え、県西部の繁殖和牛生産地域で放牧の実証試験を平成14年度より開始しました。

放牧実証において、実証試験が終了しても継続して指導できる条件設定に拘り、実証地を探



写真1 藤原さん御夫婦



写真2 藤原牧場シバ草地



写真3 葉たばこ畑後草地(藤原牧場)

す段階から普及センター、家畜保健衛生所に協力してもらいました。普及センターは地域の実情を把握していること、家畜保健衛生所は疾病、衛生面で適切なアドバイスが得られるので大変助かっています。そして、新たに放牧を開始する実証試験地を3カ所選定し、住民説明会を行いました。地域住民に実証試験の趣旨を理解してもらうことは、放牧の普及、定着を図る重要なポイントだと考えたからです。

今回、実証試験を行った農家の牛は、牛舎から外に出た経験が乏しく、放牧地は牛舎周辺とし、放牧馴致に取り組みました。電気牧柵の馴致は、牧柵に触れてパニックになり脱柵する牛がいたことから、いつでも牛舎に帰ることができる牧区を設定して馴致しました。電気牧柵に触れ慌てて牛舎に帰る行為を2～3回繰り返すうち、数日程度で電気牧柵に馴れるようになりました。現在、牛舎周辺の栗廃園や遊休地に放牧しています。実証農家も電気牧柵をうまく使って牧区をアレンジしたり、草量にあわせた放牧管理が出来るようになりました。今後は、牛舎から離れた場所で放牧を行うことを検討しています。



写真4 イタリアン採草地で放牧



写真5 栗廃園で親子放牧



写真6 急傾斜の遊休農地で放牧



写真7 栗廃園で放牧

水田・里山放牧推進協議会のホームページからこれまでのニュースレターを見ることができます。メーリングリストもできましたので参加して下さい。

ホームページのアドレス：<http://houboku.ac.affrc.go.jp/>

メーリングリストへの参加方法：kiyosi@affrc.go.jp 岡田までメールをお送り下さい。

連絡先：栃木県那須郡西那須野町千本松 768 畜産草地研究所 研究交流調整官

Fax 0287-37-7132 e-mail:kouryu_nasu@naro.affrc.go.jp

ニュースレターの内容を転載する場合は事務局の許可を得て下さい。